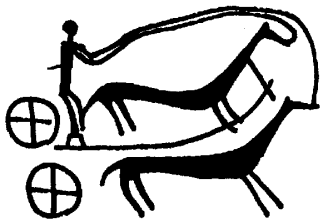
センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter　No. 42



特集：2002年度のプロジェクト
―入学者選抜企画研究部―
高大連携の形態とその効果に関する研究・新しい入試広報に関する調査研究（3～8ページ）

エッセイ＜北大旧教養教育の評価＞ 藤田　正一（15ページ）

（詳しい目次は裏表紙にあります）

巻頭言　FOREWORD

創意あふれる研究部を目指して

入学者選抜企画研究部長　加茂　直樹

本年４月より入学者選抜企画研究部長に任命され，２か月が経ちました。何とか研究部の仕事が分かりかけた状態です。本研究部は，前部長の阿部和厚先生が生みの親であり，昨年度にご退官されるまで研究部長として研究部の活動に御尽力をされました。その設立の経過は，本学におけるAO入試の検討に源を発しています。

研究部の歩み

平成８年にはポートランド州立大学，ウィスコンシン大学，オハイオ州立大学，カリフォルニア大学等に職員を派遣して，入試制度，特にAO入試の選考の方法等の調査を行なっています。平成10年には，高等学校の先生３名を加えた「入試改革研究会」が発足し，同年７月には総長の依頼により，「アドミッションオフィス構想研究会」が発足し，阿部先生が代表を務められました。この委員会で種々の意見交換がなされ，推薦入試をすでに実施していた薬学部の資料が検討されました。その中で，AO入試とはどのようなものなのか，問題点は何か，実施するとすればどのような形態が良いのか等が議論されました。この研究会の議論を経て，AO入試の導入を検討している各学部長からなるAO入試検討

ワーキンググループが発足し，AO入試の導入が決定されたのです。その後AO入試の概算要求がなされ，晴れて平成12年度に研究部および学内措置でアドミッションセンターが発足し，活動が続いております。

今必要なこととは

さて，就任の挨拶を兼ねて，私の私見をご紹介したいと思います。入学試験というと，まず頭に浮かぶのは，

1）少子化による受験生全入時代の到来
2）新学習指導要領による高校生の意欲・学力低下

の２つです。まさに，ダブルパンチです。入学後の勉学に耐えうる基礎学力をもった学生，それも出来るだけやる気のある「優秀な」学生に来て欲しいのは，教官みんなの願いでもあります。そのためには，北大への入学がしっかり動機づけられていなければなりません。北大でどのような研究が行われているのか，またどのような教育が待っているのかを，正確に知ってもらうことが大切です。そこに入試広報の重要さがあります。

新しい入試広報の構築

本研究部では，まずアドミッションセンターと協力して，これらの問題に対応できる新しい情報伝達の仕組みを作っているところです。その一つが，Campus Visit（仮称）の構想です。これは，外部からの来学者に組織的に対応するもので，例えば，道内・道外の修学旅行時における北大訪問の希望者や，道内高等学校の父母会の希望者，また道内中学校の「総合的な学習の時間」に伴う希望者等に対して，北大の歴史や伝統，また，講義を通して学問のおもしろさを実感してもらうことをねらいとしています。これらの情報伝達によって，高校生の進路選択において何らかの支援ができるものと考えています。

高大連携のネットワーク作り

もう一つは，昨年から進めている高大連携のネットワーク作りです。研究部の専任教官３名は精力的に高等学校の訪問を行なっており，様々な情報を持ち帰ってきています。これは，北大の広報という観点以外に，高大連携を実効あるものにするための人的ネットワークの観点でも重要と研究部では判断しています。高大連携の最終目標は，受験生の志望学部のミスマッチを減らすことにあります。このために，様々な仕組みを作っているところです。その一つが，昨年から旭川地区と帯広地区で始めた地区説明会です。そのねらいは，Campus Visitと同様に，高校生や保護者，また実際に進路指導を行っている先生方に直接，北大の情報を提供しようという試みです。研究部の教官が企画立案し，学部の先生方の協力を得ながら進めています。今年度は，新たに函館地区でも展開する予定です。この詳細については，高等教育ジャーナルに掲載していますのでご覧いただければ幸いです。なお，これと並行して，各高等学校で説明会も開催しています。これらの実施には各学部の先生方の御協力無しには進みませんので，是非とも御協力を御願い致します。

また，この高大連携の活動には，研究部の教官のみならず，アドミッションセンターの事務官（入試課職員を兼務）の献身的な努力があります。その様子を見ていますと，ある部署に長期に留まり，その仕事のエキスパートとなる人を育てる異動の仕組みも，事務官には必要と考えています。なお，北大の最大の広報は，我々教官がすばらしい研究業績をあげる事であることも付け加えておきたいと思います。

AO入学者の追跡調査

今述べてきたことが，車輪の片方であるならば，もう一方に，AO入試に関する追跡調査や，選抜方法や評価方法に関する研究という仕事があります。それは，ダブルパンチを受けながらも北大として求める学生を確保するには，高大連携と同様に大切な視点です。なぜ，入学試験を行なうのでしょうか？それは，定員があり，特に理科系の学部では実験演習等のため教育出来る学生数に制限があるからであります。また，「効率良く」教育するためには，学生が一定以上の学力を持っていてほしいからでしょう。

今，志望者数が定員を将来とも下回らないとします。その時，点数順に合格を決めるのはなぜでしょうか？成績がよいものは，頭脳明晰でそのうえ努力もした結果であるので，大学生になっても，さらに社会人となっても，立派な仕事をするであろう，または，する確率が高いであろうと考えるという根拠と思います。ところで，実際そうかというと，どうかなと思い答えに窮します。例えば，大学院の入学試験で成績が悪く，すれすれで合格をしたけれど，大学院に在籍中にすばらしい研究をした学生がいることを経験されたことがあるでしょう。私の知人には，すれすれ合格（指導教官であった人から聞いたところによると）であったけれど，いまや世界的に有名な研究者になっている人もいます。それには，例えば様々な入試で入ってきた学生の様子を追跡調査し，そのズレの原因を分析することによって，求める資質を明らかにすることが必要です。それを，選抜方法や評価の方法に生かしていくことが大切です。その基礎的な仕事も，数多くの高等学校の訪問の合間を見て進めるところです。

その他，多くの課題がありますが，スタッフとともに一つずつ結果を残していきたいと考えています。今後とも研究部に対するご理解とご支援を賜りたいと存じます。

特集：2002年度のプロジェクト
―入学者選抜企画研究部―

センターの研究組織としての本研究部は，北海道大学におけるAO入試導入に伴い，

(１)AO入試および入学者選抜方法に関する総合的・実践的な研究の推進，

(２)アドミッションセンターにおけるAO入試および入試広報の企画・実施，

という２つの任務を遂行するために設置されました。この任務を果たすために，年間全国約120校の高校訪問を進めながら，

「高大連携の形態とその効果に関する研究」「新しい入試広報に関する調査研究」

「AO入試の入学者に対する追跡調査」「選抜方法や評価方法に関する研究開発」

等のプロジェクト研究を推進しています。これら４つの研究はいずれも高等学校と大学との連携や接続と密接な関係があります。その中から，以下のプロジェクトの概要を通して，本研究部の基本方針について紹介します。

プロジェクト１：「高大連携の形態とその効果に関する研究」

なぜ今高大連携なのか

図１は，本研究部が目指す北海道大学の高大連携の構造を示したものです。今年度より３年計画で整備しようというものです。そのねらいは，私たちが持つ様々な優れた資産を的確かつ効果的にアピール

するには，高校生やその保護者，また高校教諭に直接情報を提供することが大切だからです。それには，ある程度の長期的な視野が必要です。

高等学校を回っておりますと，北大を志望する高校生が，今大学でどのような教育がなされているのか，またどのような研究が進められているかとっいた具体的な情報と，そのリアリティを強く求めていることがわかります。しかし，今までの高等学校への大学に関する情報伝達は，図の点線で示されたルートで行われてきました。これは，進路指導部に情報伝達を依頼するものですが，情報が停滞することが多く，私たちが期待しているほど高校生にリアルな情報が直接伝わらないという問題が生じていました。また，高等学校の進路担当者が，必ずしも意識が高いわけではなく，高校生に伝える情報量に制約が生じてしまうという問題もありました。

一方，保護者への伝達も重要です。高校生の場合，家庭での保護者の様々な助言が進路選択に大きな影響を及ぼします。また，北海道大学のような受験科目の多い大学では，できるだけ早い段階での学習への動機づけが必要です。それは，大学生のいわゆるミスマッチングを防ぐ上でも重要です。それには，保護者の存在も欠くことはできません。

以上指摘した問題を克服して行くには，高等学校の進路指導やP.T.A.と密接に連携しながら，従来のルートとは違う情報伝達の方法を開発する必要があります。それが，この図の実線で示したルートなのです。

地区説明会とは何か

地区説明会とはいわゆる出前授業とは異なり，大学が大学の授業内容や講義の様子，また入試情報を

図１　北大式高大連携における情報の提供ルート

総合的に伝えるという一日がかりのイベントです。この試みは，他の大学では行われていない，北大独自の試みです。その地域に出向くことによって，高校生やその保護者に直接大学が発信したい情報を伝達することができます。また，計画段階から地区の教諭の参加を得ることによって，進路指導を活性化することができます。したがって，前述した問題点を解決する一つの方法として適した形態と考えられます。

昨年度は全学部の協力を得て，旭川と帯広で実施し，２会場で1100名以上の参加を得ることができました（詳細は『高等教育ジャーナル』第10号）。今年は昨年度の形態に工夫を加え，函館地区を加えた３カ所で地区説明会を実施します。

下記の表は，8月25日（日）に実施される函館地区説明会のものです。この説明会は，実験や実習また演習を中心としたもので，高校生を積極的に授業の中に巻き込もうというものです。

全体の流れは，**表１**のようになっています。

まず，限られた時間の中で，北海道大学の建学の理念や歴史，アドミッションポリシーや全学教育・学部の簡単な紹介を通して，北大の夢や魅力について高校生や保護者の皆さんにお知らせします。その後，午前と午後の２回に渡って，10会場で研究部の教官あわせて18名による実習や演習を展開します。また，講師と講義の内容については**表２**に示すとおりで，細かい準備を進めています。

事前登録した来場者は，異なる講義を２回聞くことができます。その後，ＡＯ入試の情報と高校生や保護者との相談会を実施します。会終了後，各高等学校の進路担当者との情報交換を行って終了となります。

この説明会を進めるには，会を実施する情報の伝達方法の検討も重要な課題となります。その問題を解決するために，「新しい入試広報に関する調査研究」を進めており，入学者の基礎データを集め分析しています。

また，昨年地区説明会を行った旭川地区では，新２年生で北大志願者が着実に増えているとの情報が各進路部長から寄せられています。これら地区説明会では，各調査用紙を用いて高校生の動態などの定量的なデータをとっています。今年度は，そのデータとともに，志願者の増減を分析し，「AO入試の合格者に対する追跡調査」と共同でその効果を検証します。

高校説明会とは何か

北大の高大連携のもう一つの柱となるのが，各高等学校で実施する高校説明会です。前述の地区説明会へは，北大への志望動機が強い生徒や，北大を通して大学の学びを知るといった進路指導の一環として参加する生徒が集まってきます。したがって，ある程度の選別がはかられています。

しかし，北大以外を希望する資質豊かな生徒にも，

表１　函館地区説明会（感動！北大 young seminar in Hakodate）

8月25日（日）		
10:00～10:15	北大の夢と未来	
10:15～10:45	北大，その魅力を探る	
11:00～12:00（または12:15）		実習・演習1
昼　食		
13:15～14:15（または14:30）		実習・演習2
14:40～15:10	北大AO入試とは 高校生と保護者との相談会	
15:20～16:10	高等学校進路指導部担当者との情報交換	

北大の情報を直接伝達することは意味のあることです。それには，進路選択の早い段階に直接高校生に情報を流すことが大変有効です。それには，こちらから出向いて高等学校の中で説明会を実施することが有効です。規模は，希望者単位と学年集会単位の２つがあります。本説明会のねらいは，特に後者の学年全員に情報を流そうという試みです。その中には北大学以外に進学する可能性のある生徒も多く含まれており，それによって，将来の進路選択に影響を与えることもできると考えられます。

一方，北大のAO入試については，入試に関する情報の周知徹底がまだまだ計られておらず，一芸入試や青田買い入試と同列に考えられているケースも多く見られます。また高等学校の教員には，依然としてネガティブな意見が多く，高校生もAO入試の意味についてきちんと理解していないのが実情です。そのためにも，直接高校生へ情報提供できることは，情報の精度や出願動機を高める上でも効果があるものと考えられます。これらの試みも，他大学ではまだ行われておらず，今後，北海道大学の高大連携活動のもう一つの柱となるものです。

すでに，昨年度から先行事例として６校で実施しました。今年度は規模を拡大しながら，各調査用紙を用いて高校生の意識や進学動機の定量的なデータをとり，「AO入試の合格者に対する追跡調査」と共同でその効果を検証します。

これらの結果については，年度末に発行される高等教育ジャーナルにて報告します。　（鈴木誠）

表２　実習・演習―講師とテーマ実習

8月25日（日）

学　部	講座・官職	氏　名	テ　ー　マ
法学部	附属高等法政教育センター・助教授	池田　清治	民法とは何か ―大学ではじめて学ぶ法律学―
経済学部	国際分析講座・教授	佐々木隆生	グローバル化は何をもたらすのか
理学部	生態情報分子学講座・教授	鈴木　範男	タンパク質はおもしろい
医学部	情報薬理学講座・教授	吉岡　充弘	カフェインと計算
	〃　・助教授	富樫　廣子	同上
歯学部	口腔機能学講座・教授	大畑　昇	自分の指の印象と模型を造る
薬学部	ゲノム機能学講座・助教授	平　敬宏	遺伝情報を目で見よう
工学部	界面制御工学講座・教授	◆橋　英明	金属の表面処理 ―金属にどのようにして色を付けることができるだろうか―
農学部	森林資源科学講座・教授	寺澤　実	バイオマス廃棄物の資源化・循環
	地域環境学講座・助教授	相馬　尅之	食料を生産するフィールド「土」の構造・機能と適切な利用
水産学部	生物資源化学講座・教授	宮下　和夫	食と健康と海からの贈り物
	生産システム学講座・助教授	山下　成治	ブラックバスと向き合うための戦略会議
	資源生産生態学講座・助手	松石　隆	イルカ・クジラの見分け方

写真　函館東高校の学年集会にて

プロジェクト２：「新しい入試広報に関する調査研究」

戦略的な広報活動へ

アドミッションセンターは発足から３年目を迎え，多様な入試広報活動を企画・実施しています。初年度は，AO入試の広報・募集活動が中心でしたが，昨年度は研究部では「北大方式」と呼んでいる高大連携・地域連携を重視する地区説明会を含めて，15種類にわたる入試広報活動を行いました。来学者のうけいれについても“Campus Visit”（仮称）プログラムとして整備されつつあります。こうした新しいタイプの入試広報活動を推進するためには，全学的な協力体制が必要であり，高校生に北大の何をどのように伝えるべきかを明確にし，わかりやすく伝えるための方法やイメージ戦略などを考えていく必要があります。入試広報活動の効果測定も必要です。そこで，本学固有の入試広報活動の基盤づくりと募集戦略のあり方を考えるために，学内研究会「入試広報とAO入試募集戦略の効果的なあり方について」（略称：入試広報研究会）を昨年度発足させました。

現状と問題点の把握

入試広報研究会は次の３つを目的にしています。（１）北大における入試広報活動の実態を把握し，問題点を明らかにする，（２）北大入試広報活動のモデル化とフィードバック・システムの構築，（３）より効果的な入試広報・募集活動の計画（戦略），とくに道外高校生のリクルートメント戦略，を策定する。今年度末までに（１）と（３）を達成することを目標にしています。目的（１）に関しては，１）研究員の所属する学部における入試広報・募集活動や，企業の採用活動などの実態把握，２）入試広報の内容や媒体に関する分析，３）北大情報の受け手

（高校生，保護者，進路担当者，高校教員など）に関する情報収集と分析，４）北大の競争力・募集力に関する情報収集と分析，を行う必要があります。昨年度は，１）と３）を中心に聞きとり調査と質問紙調査を実施しました。２）と４）は今年度に持ち越されました。目的（３）の具体的な広報・募集活動計画は，目的（１）に関して収集した情報の分析結果に基づいて策定されます。

昨年度は，10月に１年次生約600人を対象に調査を実施し，北大受験についての意識と行動，北大に関する情報ニーズと利用パターンの関係などについて興味深い手がかりが得られました。また，旭川と帯広で実施された地区説明会の参加者からのフィードバックデータも蓄積しています。今年度は，４月に新入生全員を対象とした調査を実施し，現在分析をすすめています。これらの調査結果は，現在企画・実施しているアドミッションセンターの広報活動の改善に反映させながら，より効果的な広報活動を策定するための手がかりを探るために使われます。

効果的な広報活動のために

今年度は以下の３つの研究課題に取り組みます。

１）各学部の入試広報活動，オープンユニバーシティ・体験入学，アドミッションセンターの入試広報活動等に関してより包括的な資料を収集し，整理・分析して，本学の入試広報・募集活動の実態についての全体像を明らかにする。問題点，不足している活動などについても明らかにする。

２）大学案内・学部案内，募集要項，ポスター，広報誌などの分析ー必要な情報が適切に提示されているか，北大の個性やメッセージがわかりやすく表現されているか，改善点などを検討する。

３）受験ブランドとしての北大の価値，募集力の分析ー過去５年間の応募者数の推移，ランキングその他の既存のデータにより，北大の魅力度や競争力を明らかにする。

アドミッションセンターの活動は学内でまだよく認知されておらず，各学部との情報交換や経験を共有する機会が少ないのが現状です。しかし，北大は，入試広報活動に関して重要な局面を迎えています。独法化を目前に控え，受験者層の量的・質的拡大をめざして効率と効果の高い広報・募集戦略を全学的な視点から策定し，実行していく必要があります。オープンユニバーシティ・体験入学や地区説明会など，全学的な協力を必要とする入試広報活動が増えていて，多様な広報活動を連携／調整する必要が生じています。

入試広報研究会の活動は，北大の入試広報活動を支える基礎研究として，また，具体的な広報活動計画を策定する実践的な研究として成果を出していきたいと思います。　（山岸みどり）

センター　CENTER

学生指導のポイント
―新任教官研修会行われる―

6月6日（木）に，情報教育館３階スタジオ型多目的中講義室において平成14年度の新任教官研修会が行われました。対象者139名の内94名（出席率67.6%）が参加しましたが，最後のグループ討論まで出席したのは39名でした。

午前の部では，徳永正晴副学長が挨拶に続いて，「北大の教育―これまでとこれから」を概説しました。ついで小笠原正明高等教育開発研究部長が佐藤

昌介の生涯を中心に北大の歴史をファミリーストーリーとして語りました。小休憩ののち，「法人化問題の現状と法人化後の大学教員の権利と義務」について常本照樹法学研究科教授が解説しました。午前中最後のパネルディスカッションでは，逸見勝亮教育学研究科長を司会に迎え「大学生の指導をめぐって」，植木迪子文学研究科教授が「修学指導」について，道幸哲也法学研究科教授が「セクシャルハラスメント」について，小林理子保健管理センター講師が「心のケア」について話され，参加者の質問も受けました。特に心のケアについては参加者の関心が深く，いくつもの質問が出されました。

午後の部では，参加者が７グループに分かれ，以下のテーマでグループ討論を行い，最後に成果の発

写真１　講演する徳永副学長

写真２　パネルディスカッションのひとこま

表と全体での討論を行いました。
テーマ１（グループA，B，C）「学生が相談に来そうな問題を想定して具体的な対応の仕方を検討してください。」
テーマ２（グループD，E）「起こりそうなセクシャルハラスメントを想定して具体的な対応の仕方を検討してください。」
テーマ３（グループF，G）「参加者の誰かが見聞きした不登校または引きこもりのケースを取り上げて，具体的な対応の仕方を検討してください。」

テーマ１に関して，グループAは「進路変更―就職から大学院進学へ―」，グループBは「研究室を移りたい」，グループCは「学生の進路―進学か就職か？」という学生の相談を想定して対応策を検討しました。テーマ２に関して，グループDは「教官から学生に対して，時間外（夜・休日）の研究・指導の強要」，グループEは「1. 飲み会，２. 教室研究室」で起こりうる状況を分析しました。テーマ３に関して，グループFは「学会発表のプレッシャーから引きこもりとなったケース」など，グループGは「卒論を書くべき時期に不登校となり４年生を繰り返しているケース」などを取り上げ教官の取りうる対応などを考えました。

研修会終了後のアンケート結果によれば，午前中のパネルディスカッションと午後のグループ討論が効果的だったようです。

写真３　楽しく議論を進めるグループ討論

生涯学習　LIFELONG LEARNING

第１回生涯学習フォーラム「転換期の欧州職業教育訓練システム」のご案内

本年度の第１回生涯学習フォーラムが7月3日に実施されます。今回のフォーラムでは，転換期にあるヨーロッパの職業教育訓練システムについて，EUの発足，IT革命の進展，産業構造の高度化などを背景に

進展する中等後期職業教育システムの拡充など，各国の経済の基礎をつくってきた人材育成のあり方の現状と課題を探ることが課題です。

フォーラムでは名古屋大学寺田教授グループと共同で日欧の職教育訓練システムの研究を行っている，マティアス・ピルツ氏（リューネブルグ大学講師・博士）による，「転換期の欧州職業教育訓練システム」というテーマで表記のような講演とディスカッションを計画しています。当日は英語で講演が行われますが，日本語の通訳が行われます。教職員・大学院生・学生の多数のご参加をお待ちしています。

日時：平成14年7月3日（水）
午後4時30分～6時30分
場所：情報教育館４Ｆ　共用多目的教室(1)
講師：Matthias Pilz　博士
（ドイツ・リューネブルグ大学講師・職業教育経済学専攻）
連絡先：高等教育機能開発総合センター
生涯学習計画研究部　町井輝久
電話：011-706-6069
e-mail: machii@high.hokudai.ac.jp

平成14年度北海道大学公開講座
高校生の聴講を可能に

平成14年度の北海道大学公開講座は，「21世紀の知と技－世界に発信する北海道大学－」をテーマに，7月1日から7月25日（各回午後6:30～8:30）まで８回にわたって，情報教育館を会場に開講することになりました。

21世紀を迎え，人文・社会科学，自然科学の各領域において「知の変革」が課題とされ，各種の技術的・技能的分野での「人の技」のあり方も問い直されつつあります。本講座は，第１回の西村伸一郎理学研究科教授による「甘くないお砂糖の生命科学」を皮切りに，それぞれの回が北海道大学が世界に発信している研究の最先端を紹介するという構成になっています。

北大では高校生に対して，北大の研究・教育の現状についての理解を得る機会をオープン・ユニバーシティや出前講義などの形で様々に取組んでいます。この公開講座も，各講師は高校生のレベルでも理解できるようにと準備をすすめており，北大がどういう大学かということを知ってもらい，北大で学ぶことの意義をより深く考える絶好の機会になります。北海道大学公開講座は，従来は18歳以上の市民を対象に，受講料を徴収して開催していましたが（募集定員150名），今年度は上記のような内容であることを生かして，高校生については，一般の受講生とは別に，毎回30名程度を限度に無料で聴講できるようにしました。このことについて，札幌市内及び近郊の高校生の皆さんにも聴講を呼びかける案内をしています。

平成14年度北海道大学公開講座
21世紀の知と技―世界に発信する北海道大学―

＜第１回　7月1日（月）＞
甘くないお砂糖の生命化学
理学研究科　教授　西村紳一郎

＜第２回　7月4日(木)＞
生物廃棄物から高度機能性素材へ
地球環境科学研究科　教授　西　　則雄

＜第３回　7月8日(月)＞
北大発ITベンチャーの過去，現在，そして未来
工学研究科　教授　青木　由直

＜第４回　7月11日(木)＞
刺激と脳の発達
医学研究科　教授　渡邉　雅彦

＜第５回　7月15日(月)＞
生物に学ぶナノテクノロジー－自己組織化の化学－
電子科学研究所　教授　下村　政嗣

＜第６回　7月18日(木)＞
文化的多元とメディア
国際広報メディア研究科　教授　大平　具彦

＜第７回　7月22日(月)＞
知と技の仲介－長期不況と大学への期待－
経済学研究科　教授（北海道ティー・エル・オー（株）取締役）　猪上　徳雄

＜第８回　7月25日(木)＞
社会的知性と信頼
文学研究科　教授　山岸　俊男

各回とも，午後6時30分から午後8時30分まで（講義時間90分，質疑応答30分）

入学者選抜　ADMISSION SYSTEMS

見てみようよ，北大を！
2002年度オープンユニバーシティ・体験入学

2002年度北海道大学「オープンユニバーシティ」が，８月１日（木）に函館キャンパス，８月５日（月）に札幌キャンパスで開催されます。函館キャンパスでは水産学部のみの開催ですが，札幌キャン

パスでは，全12学部，医療技術短期大学部に加え，低温研究所，大学院地球環境科学研究科，附属図書館，附属図書館北分館，大型計算機センター，アドミッションセンターで開催されます。また，「体験入学」は，６月22日（土）に教育学部，８月２日（金）に水産学部（函館キャンパス），８月６日（火）（学部により９日（金）まで）に11学部と医療技術短期大学部で開催されます。各部局で練られた学部紹介，体験講義，体験入学などの企画案は，「平成14年オープンユニバーシティ・体験入学担当教官連絡会」でとりまとめ，案内冊子の形でアドミッションセンターから全国1428の高等学校（道内383校，道外1045校）にポスターとともに送付されました。冊子は，北大ホームページでも見ることができます。「オープンユニバーシティ・体験入学」は，北大の研究活動，施設を高校生はじめ多くの方々に知っていただくために情報と学習機会を提供するものです。昨年度は，オープンユニバーシティと体験入学とあわせて3,000名を超える参加者がありました。意欲があり，目的意識の高い優秀な高校生の北大への進学動機を強める効果が大いに期待されています。案内冊子についてのお問い合わせは，北海道大学アドミッションセンターへお願いします（電話：011-706-7490）。

表３　2002（平成 14）年度入学者選抜企画研究部研究員名簿

入学者選抜企画研究部　22名

（学内 19 名）

氏　名	所　属	専門分野	研究テーマ	区分
◆　和順	文学研究科助教授	中国文化論	高校と大学の教育接続に関する研究：入試改革研究会	継続
中村　研一	法学研究科教授	国際政治	同上	継続
佐々木隆生	経済学研究科教授	国際経済学	同上	継続
工藤　昌行	工学研究科教授	凝固，材料組織学	同上	継続
斉藤　　裕	農学研究科教授	生物生態学	同上	継続
尾島　孝男	水産科学研究科助教授	応用生物学	同上	継続
小内　　透	教育学研究科助教授	教育社会学	入試広報とAO入試募集戦略の効果的な在り方について	継続
寺沢　浩一	医学研究科教授	法医学	同上	継続
山本　眞史	工学研究科教授	物質情報エレクトロニクス	同上	継続
伊藤　和彦	農学研究科教授	生物生産工学	同上	継続
栗原　秀幸	水産科学研究科助教授	応用生物科学	同上	継続
山田吉二郎	国際広報メディア教授	公共伝達論	同上	新規
瀬名波栄潤	文学研究科助教授	西洋文学の分析から－	高校間格差に関する研究－北海道大学一般入試「英語」の成績	継続
佐藤　公治	教育学研究科助教授	発達心理学	同上	継続
林　　◆	法学研究科教授	商法	同上	継続
小泉　　均	工学研究科助教授	放射線化学	同上	継続
長南　史男	農学研究科教授	農業経済学	同上	継続
山本勝太郎	水産科学研究科教授	生産システム学	同上	継続

（学外３名）

氏　名	所　属	専門分野	研究テーマ	区分
玉田　茂喜	北海道札幌北高等学校教諭	国語教育	高校と大学の教育接続に関する研究：入試改革研究会	継続
西嶋　潤一	北海道旭川東高等学校教諭	地歴・公民教育教育	同上	継続
橋村正悟郎	北海道札幌東高等学校教諭	理科教育	同上	新規

投稿　CONTRIBUTION

単位制の謎

北海道教育大学函館校教授　宇田川 拓雄

1. はじめに

センターニュースの18，19，27，28号で単位に関わる話題が取り上げられたことを記憶している方もおいでかと思います。28号の奥先生の記事は2000年2月のことで，一年半前になります。その後，遠山プランを初めとする大学改革関係のニュースが全国的に報道され，国立大学の改革が本格化しつつあります。センターニュースも主として北大内部の改革の実際を伝えるようになりました。

18号の下澤教授のご提案に論争（19号）を仕掛けた私としては，未だ「単位」の問題が解明されたような気がしていません。釈然としないまま日々の仕事に追われていました。ところが運良く，この4月から半年間の研究年（サバティカル）をもらえることなり，気掛かりになっていた幾つかの問題を考える時間ができました。単位について重要なことに気づいたので，ご報告したいと考えます。

2. 問題の所在

小笠原教授のまとめ（27号）にあるとおり，下澤教授のご意見は，

（１）「毎週１時間15週の講義を１単位とし，講義は１時間に対し，２時間の教室外の準備・学習が必要とすると決められている（＝大学設置基準）ということを学生に知らせるべきだ。大学では聴いただけで分かる講義をしてはいけない。」

と要約されます。これに対して宇田川は，

（２）「教員の側としても授業１コマに対して２コマ程度の準備，採点，指導の時間が必要なので，週５コマの授業を担当するとすると15コマとられる。この他，管理運営などにも時間がかかるので，研究時間がなくなってしまう。上記基準は現実的ではないのではないか」

という疑問を提出しました。１単位45時間の根拠として小笠原教授は，

（３）「アメリカの１週間の労働時間の標準が45時間程度であったことに由来しているのではないか」

と述べています。

単位の計算を含む今日の新制大学の仕組みは戦後占領軍の指導により作られたものであり，大学の大衆化にともない，1991年に大きく改定されました。問題は，小笠原教授の指摘するとおり，「単位制度の持つ意味を十分検討しないまま」制度が作られ，さらに現状に合わせて手直しされたため，今や誰もその「本来の意味」が分からなくなっているところにあると思われます。

3. 大学教授はなぜ働かないのか？ ―単位制の意味―

一般市民に「先生は１週間に何コマぐらい授業をするんですか」ときかれ，正直に「５，６コマです」と答え，「そんなに少ないんですか！」と驚かれた経験を持つのは私だけではないでしょう。１コマ90分とすると週５コマで合計７時間半です。確かに少ないですね。なぜこれで許されるのでしょうか。その答えの鍵は単位制です。

実は下澤先生の主張が正しく，私の「現実的でない」という主張は，現実が間違っているので，正し

くないと考えられます。まず小笠原先生のご指摘を受け，

（１）教員も１週45時間労働する，と考える。

（２）教員は１コマの授業について２コマ分の準備・指導の時間をかけなければならない。

（３）１単位は学生が当該科目を45時間勉学をし最終試験に合格したことを意味する。

（４）教員は45時間全てを教室で指導する必要はない。そこで大学として一律1/3の時間数を教室で指導することに決める。

（５）教員は，学生が授業１回分につき教室外で２コマ分の勉学を15週分，つまり，合計45時間勉強すれば習得できる程度の難しさと分量の教育を行わなければならない（＝下澤，5ページ）。

（６）教員は学生が１単位あたり，45時間分の勉学をすることを責任をもって指導，監督しなければならない。

（７）１科目２単位とすると授業担当者は学生が90時間分の勉強をするように授業を行い，課題を出し，採点し，指導し，単位を取得できるように配慮しなければならない。

これが単位制の本当の意味だと思われます。ですから学生に90時間分勉強させない教員は，働いていないといわれても仕方がありません。逆に言えば，全ての教員が１科目あたり90時間の教育指導をきちんとすればその大学の評判は高くなること間違いないのではないでしょうか。

4. 現実的な労働時間

今，１日５コマ，週５日働くとした場合，１週間には25コマあることになります。週5コマ授業を行うと，15コマ分は教育に使うので，先に指摘したとおり，研究時間がなくなってしまいます。だが，そう考えるのは正しいのでしょうか。

今年の３月に，研究のためカリフォルニア州立大学ドミニゲス・ヒルズ校を訪問した時のことを紹介します。そこの先生と話をしていて研究時間のことに話題が及びました。彼女は年配の教授ですが，「私の大学は『教育をする大学』（teaching university）なので75%の時間をティーチィングに使わなければならないんですよ」と言っていました。

よく知られているように，カリフォルニアの公立大学は９つのUC（カリフォルニア大学。総合大学。他に医学校と法曹大学校が各1校ある），22のCSU（カリフォルニア州立大学），約180のコミュニティカレッジがありピラミッド構造をなしています。UCにはバークレー校，ロサンゼルス校（UCLA）などが含まれ，いわば超難関大学であって，研究大学（research universities）と呼ばれます。CSUはセカンドクラスとは言え有名な大学も多いし，良い仕事をしている研究者も少なくありません。研究者である以上，できるだけたくさん研究したいのではないか，と私は思うのですが，この「75%を教育に使う」という言葉にはショックを受けました。

どんな研究をしていようとも私たちは教員だから，労働時間の半分以上は教育にあてるべきだ，という考え方ももっともだと思われます。北大は研究大学でしょうから，今，教育時間の割合を60%とします。すると，25コマ×60%＝15コマとなり，残り10コマが研究時間になります。これは単なる数合わせに見えるかも知れませんが，単位制度はこのような考え方で作られているのではないでしょうか。

5. 教育・研究・お金

大学教員の労働時間と並んで，国立大学の教育改革論で欠けているのがお金の話です。アメリカでは，教員は週５コマ程度が義務であり，その労働に対して給与が支払われると言われています。外部の研究費を獲得すると，オーバーヘッドとして大学当局がその一部を吸い上げ，そのお金で非常勤講師を雇い，授業を肩代わりさせることにより，教育の義務を軽減することがある，と聞いています。

つまり，競争的研究費を獲得した者には研究の機会を与え，そうでなければ教育に専念させるのです。ただし例えば25%の時間は研究に使ってもよい。無論その前提として，優れた研究には必ず研究費が与えられなければなりません。さらに，労働時間を論ずるには研究費と給与の問題も同時に考えなければ

意味がありません。高度で難解な研究や独創的革新的な研究と学生に対する教育が両立することはそうとう困難ですが，時期を区切って特定の教員に研究に専念させることは可能でしょう。単位制度をうまく使えば，これら一見矛盾する課題を解決する方法が得られるように思われます。一科目90時間分の指導は教員も大変ですが，学生も欠席したり遊んだりする暇がなくなり，充実した学生生活を送ることになるでしょう。

エッセイ　ESSAY

連載

Boys, Be Ambitious !
北大旧教養教育の評価―個人的体験(2)―

副学長，獣医学研究科教授　藤田　正一

アメリカ編

ジリジリと真夏の太陽が肌に心地よい。真っ黒に日焼けして「ホー」と呼ばれる鍬のようなものを使って，私は乾いたイチゴ農場の土を耕していた。農場はオレゴン州ポートランドから車で２時間程のところだった。毎日，大地を耕していると，この大地と共に，俺は何でも耐えられる，何をしても生きてゆけるという自信が漲ってくる。どこの国も農民は保守的であると聞いた。分かるような気がする。農民の意識の後進性故では無く，この大地に根ざした自信がそうさせるのであろう。

イチゴが熟する時期になった。イチゴ農家は何台もスクールバスのポンコツを持っている。これを列ねて真夜中にポートランドのバーンサイド・ストリートまで向かう。午前２時頃到着し，バスを路上に駐車してコーヒーショップで待つこと30分。暗いバスの中に，ポツリポツリと人影が入ってゆく。やがてバスは無言の人々で一杯になった。彼等は，ワイノーと呼ばれるホームレスだ。アル中が多くワインをよく飲むのでワイノーと呼ばれているらしい。音もなくバスは発車する。

午前５時頃，バスは農場に到着。人々は農家からカートンとよばれる箱を受け取り，イチゴを摘んでは箱に入れる。箱いっぱい摘んで，目方をはかってもらって，そのつど金をもらう。私も同じ仕事をしたが，学生アルバイトなので，アメリカの法律に基づく最低賃金は支払ってくれた。やがて彼等はワインを買うのに十分な金を得ると，農家がイチゴのカートンと一緒にトラックに積んできたワインを買って，その場で飲み始めた。

獣医学部のみんなが就職を考えはじめる頃，私は両親に「アフリカに行かせてくれ。」と頼んだ。「それだけは止めてくれ。」と母親が必死で止める。じゃあアメリカに行かせてくれ。両親もアフリカよりはと言うことで折れた。英会話に通った。1967年3月に卒業してからは，英語学校に通った。英語学校では神奈川大学を出て，のちに東京外国語大学を再受験して合格するＴ君と，絵を描くエチオピア人と恋仲になったOさんと言う女性と親しくなった。Ｔ君は将来フランスに渡るのが夢であった。Ｏさんはエチオピアに帰ってしまった彼氏と連絡がとれずに苦しんでいた。いずれ彼のもとに行くことが夢であった。

３人で平塚の七夕見物に行った。1967年7月7日のことである。「10年後の1977年7月7日は覚えやすいから，どこにいてもぜひ会おう。」パリのエッフェル塔の下で1977年7月7日午後7時に会う約束をした。1977年7月，私はニューヨークにいた。貧乏大学院生だったが，１年間かかってパリ行きの旅費をためた。

約束の時間にエッフェル塔の下に行ったが，二人とも現れなかった。仕方がないので一人でパリを歩き廻り堪能した。

Oさんとは67年の暮れに私がアメリカに渡って以来会っていない。エチオピア人の彼氏からドイツに渡ったという連絡があり，自分もドイツに行くと言っていた。T君は私がアメリカに渡った翌年，東京外国語大学に合格し，夏休みにオレゴンに遊びに来た。早速彼を例のイチゴ農場につれてゆき，二人でアメリカ一周の旅の旅費稼ぎのアルバイトを開始した。彼にとって最初のアメリカは，貧困と絶望の人々との共同作業であった。彼とはアメリカ一周の旅の途中，ニューヨークで別れた。彼はその足でイギリスに渡った。イギリスでしばらくバイトして，フランスに渡り，フランス語が話せるようになったとの手紙を最後に消息が無い。

「ジス・イズ・アン・アンビシャス・ペーパー。」オレゴン大学に来て間もない頃，外国人のための英語のクラスを受けていた。自分の国の学生気質について書く課題が出た。日本人学生気質とアメリカ人学生気質を対比して文章を書いた。先生は，そのペーパーを「アンビシャス」と言ってほめ，皆の前で読み出した。「ビー・アンビシャス」というクラーク先生の言葉を，「アンビシャスと言ったら，アメリカ人は別の意味にとる。あまりいい言葉では無い。」などと物知り顔に評する人がいた。そのアンビシャスという言葉を，明らかにほめ言葉として使って，私の文章をみんなに披露してくれた。嬉しかった。嬉しかったのは，「アンビシャス」がよい意味で使われているのを実体験出来たからである。

あれから30年の後，ほめ言葉としての「アンビシャス」に再会したのは，北大の図書館の北方資料室であった。開拓使留学生の津田梅子がジュリアード音楽学校から転校する際の推薦状だった。その推薦文の中に，「アンビシャス」という言葉が，明らかに彼女の長所として使われている。まぎれもなく，クラーク先生の時代の言葉である。

私の留学当時，アメリカはベトナム戦争のさなかであった。大学では学生達が徴兵拒否を行ったり，反戦デモが頻繁に起こったりしていた。留学生の私もその中にいた。スチューデント・ユニオンの食堂をうめ尽くした学生たちの前で，私もベトナム戦争批判の発言をした。すぐに「留学生が何を言う。内政干渉だ。」と言う声があがった。「アメリカは巨大すぎる。この国の行動は世界に影響をおよぼす。

オレゴン大学　　カット：榎本靖子

ベトナム戦争は世界の人々の問題だ。」と反論した。トイレに立った。アメリカ人学生が隣に列んだ。「お前はガッツがある。言うべきことを言わんやつがいるが，おまえはちがう。」と言ってくれた。

やがて，オレゴン中を震撼させる事件がおきた。沖縄に駐留していたアメリカ軍の退役将校が，沖縄に保存してあった神経ガスがオレゴン州のハーメストンに送られてくるということをすっぱ抜いたのである。鉄道で運ぶのであるが，容器の耐用年数が過ぎているものもあり，大変危険で，鉄道線路の両脇数十マイルに住んでいる人々は輸送中避難しなければならない。毒ガス倉庫の番をしている兵士の中には，恐ろしさでノイローゼになったものもいるなどと，このガスの恐ろしさを話した。

サリンという毒ガスの名前を聞いたのはこの時がはじめてである。私もこの人の講演会を聴きに行っていた。「危ないものをオレゴンに持ち込むなと言うが，沖縄の人はどうなるんだ。」怒りに震えながら私は質問した。「危険で動かせない。動かさない方が良い。」以外の答えは無かった。私はすぐに沖縄（県）の屋良主席に手紙を書いた。このことをあつかった新聞記事も同封した。

オレゴン中が蜂の巣を突いたような騒ぎになった。「毒ガス来るな！」の大合唱である。しかし，沖縄の安全はどうなるんだ。毒ガスは比較的簡単に加水分解できると聞いた。それなら，無毒化したら良い。毒ガス反対運動の人々の周辺で，一人沖縄を守れの運動を始めた。ポートランドで行われた10万人集会にも出かけて，主催者に話をさせろとねじ込んだ。オレゴン大学の教授が，「お前，こんなことをしたら強制送還になるかもしれないが，いいのか。」と心配してくれた。かまわず話させてもらった。在米2年目のつたない英語でである。

「毒ガスを地球上から消してしまえ！」「沖縄の人々の安全を第一に考えるべきである。」アメリカ批判の言葉もたくさん述べた。必死の訴えに，集まった人々は総立ちで拍手してくれた。自国の悪口を外国人から聞く程不愉快なことは無かろう。しかし，アメリカ人達はそれをも受け止め，総立ちで拍手してくれたのである。民主主義の歴史の深さを感じた。

沖縄の屋良主席に送った私の手紙は，プレスにリリースされたらしい。新聞記事になり，ラジオのニュースにもなって，沖縄も大騒ぎになったという。沖縄の新聞に掲載されたこの記事を北海道で読んでいる人物がいようとは，そしてその人物に30年後に会おうとは夢にも思わなかった。沖縄では「毒ガス出ていけ」運動が盛り上がり，行き場を失った毒ガスは，ついに，ジョンストン島という太平洋の小島に格納されることになった。

オレゴン大学で学部１年生からやり直した私は，結局４年間かかって学士と修士の学位を取得し，ニューヨークのアルバート・アインスタイン医科大学で博士号を目指すことになった。ここで７年かかって，ようやく博士号を取得し，日本に帰ってきた。アインスタイン医科大学在学中に，留学で来ていた明治薬科大学の教授に出会った。私のことを，「山賊が山からおりてきて実験しているようだ」と評していたにもかかわらず，「博士号ををとったら俺のところに来い」と言ってくれた。

明治薬科大学には２年程お世話になった。その後，千葉大学薬学部助教授を９年程つとめ，北大獣医学部の毒性学講座教授の公募があった時，自薦で応募。採用されて今日にいたる。本学に戻ってからすでに11年になる。

（次号に続く）

カット：氏間多伊子

センター日誌　CENTER EVENTS, *April - May*

4月

5日　・（行事）新入生オリエンテーション
　　・（行事）TA研修会
8日　・（行事）入学式
9日　・（行事）学部ガイダンス
　　・（会議）第71回センター教官会議
　　・（会議）平成14年度第1回センター点検評価委員会
10日　・第1学期授業開始
17日　・（会議）第14回教務情報システム専門委員会
23日　・（会議）第44回全学教育委員会
24日　・（会議）第23回教務委員会幹事会
25日　・センターニュース第41号発行

5月

7日　・（会議）第20回教務委員会
21日　・（会議）第72回センター教官会議
30日　・（会議）平成14年度第1回予算・施設委員会小委員会
　　・（会議）第92回全学教育委員会小委員会
31日　・（会議）平成14年度第2回センター点検評価委員会

行事予定　SCHEDULE, *July - December*

	【日（曜日）】	【行事】	【備考】
7月		【17（水）に月曜日の授業を実施】	
	23（火）～ 25（木）	補講日	
	26（金）	第1学期授業終了	
	29（月）～ 8月8（木）	定期試験	
8月	9（金）～ 13（火）	追試験	
	9（金）～ 9月27（金）	夏季休業日	
	29（木）正午	定期試験及び追試験成績提出締切	
9月	中旬　～ 下旬	学科等分属手続	当該学部
	集中講義期間	集中講義期間	
	30（月）	第2学期授業開始	
10月	9（水）～ 10（木）	1年次履修届受付	
		2年次以上履修届受付	当該学部
11月			
12月		【24（火）に月曜日の授業を実施】	

センターニュース　2002, No. 42 目 次

巻頭言 ..... 加茂　直樹 1

特集：2002年度のプロジェクト
　　―入学者選抜企画研究部― 3

プロジェクト１：
「高大連携の形態とその効果に関する研究」
..... 3

プロジェクト２：
「新しい入試広報に関する調査研究」 7

新任教官研修会行われる 8

「転換期の欧州職業教育
　訓練システム」のご案内 10

平成14年度北海道大学公開講座
　高校生の聴講を可能に 11

2002年度オープン
　ユニバーシティ・体験入学 12

単位制の謎 ..... 宇田川拓雄 14

＜エッセイ＞
北大旧教養教育の評価―個人的体験(2)―
..... 藤田　正一 16

センター日誌・行事予定 19

目次・編集後記・訂正 20

訂 正

センターニュース39号および41号に以下の誤りがありました。

39号11ページ：東京芸術大学教授渡辺健二→東京芸術大学助教授渡辺健二

41号10ページ表２最終段：言語文化部　山下好孝→留学生センター　山下好孝

お詫びして訂正いたします。

編集後記

アムステルダムで，ゴッホ美術館に立ち寄った。あの独特のタッチに隠された，彼の画力の凄まじさに驚いた。

久しぶりに，ヴァルヒアのパイプオルガンを聴いた。光を失った，彼の指先から立ち上がる音の造形に圧倒された。

「えせ」全盛の時代である。それはあらゆるジャンルに深く蔓延っている。いかにしてそれを見抜くか，その眼力の養成が大学教育に求められている。（うさぎ）

センターニュース　第 42 号
（北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌）
発 行 日：2002 年 6 月 25 日
発 行 元：北海道大学高等教育機能開発総合センター
〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
電話 (011)716-2111 ・FAX (011)706-7854
編集委員：小笠原正明・西森敏之・◎細川敏幸・
町井輝久・安藤厚・山岸みどり・鈴木 誠・
池田文人・亀野 淳
ご意見，お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話： (011)706-7514; FAX (011)706-7521
インターネット ホームページ：http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center